

儒学者 細井平洲と長崎の盟友 真野子柏

中村 早苗

長崎駅から歩いて数分の所に本蓮寺(日蓮宗)がある。私達は、平成十八年に、東海市の文化財調査委員会の方々と、細井平洲の盟友である真野子柏の墓所を探し求めた。



真野氏旧居住のあった外浦町(現万才町)

本蓮寺の後山は、大変広く、直ぐに探すことが不可能であったが、古賀十二郎『続長崎名家墓所』(長崎歴史文化博物館所蔵)に記載されていたのを、シーボルト記念館館長の織田氏に教えていただき、その地図をもとに探し求めた。細井平洲に関する書籍は、大正時代から今日まで数多く出版されているが、真野子柏の墓碑についてはこれまで不明であった。本蓮寺後山の中腹辺りで、私達は『子柏先生之墓』と刻された墓碑を発見した。過去帳には、『寛政四年子正月朔日卒諡』とあるのだが、読みとれなかった。私達は、没後二百十四年目に対面したのである。子柏先生は、港の見える後山で、静かに時代の行く

末を見届けていらしたのであろうか。しかし、真野家墓所の中で子柏先生の墓碑は、無残にも倒れていた。私はその荒れ果てた状況が、とても気がかりであった。そこで子孫が絶えてしまったのかを確かめるために、再び本蓮寺を訪れたが、ご住職が不在だったので、後日お電話をすると、現在は何も残っていないのでわからないということであった。そこで、私は、当時の限られた文献から積み上げていくしかない気持ちで切り替えて、調査を始めることにした。

医学を学び、長崎に帰ったが、仕官することなく、自分の家で治療に従事した。医師は日一日と巧みに、医業は一日一日と広くなり、どんな遠い所からも、多くの病人が駿庵先生の診察を求めてやってきた。そして多くの病人が、先生のお陰で治るようになった。原文には、『困りて其の居を号し施設所と曰い、其の費を支給せしむ。』と記されている事から、駿庵先生が長崎奉行所の役医師として、真野家の一代目であったことがわかった。

先生の子柏の子である三圭についても、貴重な資料が存在していた。『続長崎實録大成』の長崎志編巻十一目録に、『一、九月十日、施薬醫師真野三圭、父英柏(子柏)以来、市中極貧ノ者自宅^ニ引取、養生所ヲ建、致^ニ療治^ニ遺^ニ處、手狭^ニ付建廣メ、其外病人臥具等取繕ヒ、彼是人費相嵩趣達^ニ聽聞、是マデ被^ニ下置^ニ手當ノ外、銀五百目増、都合壹貫五百目ツツ為^ニ手當^ニ被^ニ下之^ニ』と記されている。これは文化・文政十四年までの記録である。

この資料からも、真野家三代が長崎で役医師として、医業に携わっていたことがわかる。決して豊かな生活ではなかったと思われるが、貧しい人々を引き取って治療にあたっていた。まさに「医は仁術」であった。やがて日本は開国、近代化に向かって激しく移り変わっていく。其の後真野家に関する情報は定かではない。ここに真野家の歴史の一端をまとめる機会をいただいたことを、大変嬉しく思っている。

今年平成二十三年も、また長崎に暑い夏がやってくる。文化財とともに消え失せ 夏木立 最後に、真野子柏の墓碑がよき時代を甦らせ、再び輝くことを願っている。

(平成二十三年六月記 大村市在住)

私もその私が、細井平洲を研究するようになったのは、細井平洲の学問に対する深さと、「学問と今日とは二途にならざるなり」ということばであった。先生は仁徳の実践を最も重んじた江戸中期の儒学者(折衷学派)で、米沢藩の十代藩主、名君上杉治憲(鷹山)の師として有名である。

その若き平洲が、唐音を学ぶために遊学した長崎に、三人の盟友がいた。そのうち小河仲栗と飛鳥子静の二人は、其の後平洲と共にしていたので江戸で没している。その事は、嚶鳴館詩集や嚶鳴館遺稿にも残っているが、唯一真野子柏だけが、父駿庵の跡を継いで医業に携わっていたので、長崎の地で没している。その子柏先生の墓碑を発見した時は本当に嬉しかった。

真野子柏は、御施薬医、御救養生所医として、享保十年(一七二五)長崎に生まれ、寛政四年(一七九二)六十八歳で没している。子柏は、延享四年(一七四七)母親の危篤の知らせを受けた病身の平洲を、尾張平島村まで付き添ってくれた命の恩人である。また父親の真野駿庵は進歩的な仁医で、平洲が遊学中に望岳楼で大変お世話になった人物である。細井平洲が駿庵の七十歳を祝って送った漢詩が、嚶鳴館遺稿『真駿庵七十寿序』にある。

駿庵先生は、年少の頃長崎から京都に遊学し、後藤良山について漢方

風信

○江戸時代の長崎の年中行事を記したものととして野口文龍の寛政九年(一七九七)の序文をもつ『長崎歳事記』は良く知られている。(お読みになられたい人は『長崎県史巻五』に収録されている)

○同書の十月行事の中に「此の亥の日は佳節とて家に餅を搗て相祝す。俗に、是を亥の子といふ」とある。この餅のことを「亥の子餅」と言った。この十月は旧暦のことであり現在の暦では十一月四日が亥の子の日になっている。

○この「亥の子の日」田の神様は山にお帰りになり、立春がくるまでお休みになられるそうである。歳事記によると「此夜市中の小兒、手ごろの石を縄にてゆひ、双方より引きあいて家々の門に至り石段をうち口々にうたう:」○この行事は、一六〇二年長崎イエズス会編纂の日ポ辞書にも次のように収録されていた。

Ino co an no 積み重なって種々の色をしてあらわれる雲で大風や嵐の前兆。○この日より家々「こたつ」を開くとも記してあり、又、「猪は多産であり子孫繁昌、万病を除く日」とも記してあるので、「亥の子の日」より家々冬に備えての準備を始めた日と考えたらどうであろうか。

○十一月は旧暦では霜月という。今年の旧暦の十一月一日は、十一月二十五日である。前出の長崎歳事記十一月行事をみると先ず十一月は八日フイゴ祭に始ると記してある。当日は家々に祀る「お稲荷様」に御酒をあげ供物をささげ客を請じ大に賑ふ」とある。私の若い頃、伊良林の若宮稲荷神社で「ウソカエ」という神事があり、お互に「おみくじ」をかえる行事があった事を思い出している。

○次に歳事記の十一月行事のうち最大の事として「冬至の事」が記してある。現在の暦によると冬至は十二月二十二日となっているので来月の「ながさきの空」で冬至の事は記すことにする。

○今月ご寄贈いただいた書籍

『十六世紀宣教師たち九州横断の道—アルメイダ街道—加茂宗人氏著 著者は実際にアルメイダの道歩いておられる。そして其の土地、土地の資料を集紹介しておられた。感激の本でした。(梓書院発行 一、〇〇〇円)九州歴史資料館より『平成二十二年年報と研究論考36』を戴く。西谷・杉原・大庭各先生の考古学・岡寺先生の古城跡等の研究、大いに学ばねばならぬ事ばかりであった。(九歴資料館発行)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一—一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 2F

